

令和元年6月14日現在

機関番号：17701

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K11663

研究課題名(和文) がん患者配偶者の悲嘆プロセスの縦断的研究

研究課題名(英文) Grief process of the spouses of patients with advanced cancer : A longitudinal study

研究代表者

久松 美佐子 (Hisamatsu, Misako)

鹿児島大学・医歯学域医学系・助教

研究者番号：10512600

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本の進行がん患者の配偶者の闘病中から死別後までの体験を調査し、その体験の特徴を明らかにすることである。配偶者遺族と緩和的化学療法を受ける患者の配偶者に半構造的面接を行い、質的帰納的に分析した。

結果、配偶者は、緩和的化学療法への期待が大きく、治療中止になって初めて、死別することと直面し、対応を模索していた。また、日本の配偶者の特徴として、感情表出、治療中止の意思決定について困難を抱え、死別後にも影響することが明らかとなった。看護師は、緩和的化学療法早期から患者と家族の感情表出を促し、納得のいく意思決定ができるよう支援することの必要性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、緩和的化学療法を受けているがん患者の家族のゆらぎが予期悲嘆や悲嘆に影響していることが明らかとなり、看護師が、いかに治療中に患者・家族の感情表出や意思決定、予期悲嘆の体験を支えるかが重要であることが示唆された。

この研究成果は、家族の過度のストレスや精神的苦痛を与える予期悲嘆の予防、さらには複雑性悲嘆の予防、終末期の患者・家族理解および看護師の技術向上に向けて貴重な知見であり、医療・福祉に寄与すると考える。

研究成果の概要(英文)：This study aims to clarify the experiences of the spouses of patients with advanced cancer from the start of treatment of the patients until after their death. We conducted a semi-structural interview with the spouse of the patient undergoing palliative chemotherapy and the spouses of deceased patients and analyzed qualitatively inductively.

Spouses were expecting the effects of palliative chemotherapy. After the hospital's recommendation for palliative chemotherapy discontinuation, the spouses had to chagrin over having to discontinue palliative chemotherapy and experienced facing the unavoidable reality of bereavement. As a characteristic of Japanese spouses, there were difficulties in expressing emotions and making decisions to stop treatment. The experience before the spouse's bereavement influenced after the bereavement.

It is necessary for nurses to support patients and their families to express their emotions and to make decisions from an early stage of palliative chemotherapy.

研究分野：精神看護学

キーワード：緩和的化学療法 予期悲嘆 悲嘆 家族

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

がん化学療法の進展に伴い終末期医療の在り方はますます重要な課題となっており、終末期医療における看護師の果たす役割は極めて大きい。終末期の看護は、がん患者本人のみならず、いずれ死別を体験する家族にも配慮したケアが必要である。

これまでの研究において、家族の予期悲嘆については、複雑で多角的、個別的であることが示されているが、適切な理論的概念枠組みを確立するには至っていない。また、悲嘆については、幾つかのモデルが提言されているが、死別前から死別後まで多角的な視点から縦断的な検証を行われたものはない。

さらに、手術による切除が難しい進行・再発がんに対して緩和的化学療法が実施されている割合が増えているが、この療法を受けるがん患者家族の死別前から死別後における悲嘆のプロセスの特徴や、悲嘆に影響する要因については十分に調査されていない。そのため家族の悲嘆プロセスの心理過程を理解し、予期悲嘆の達成、悲嘆の遷延の予防に関わることが求められる。

2. 研究の目的

(1) 緩和的化学療法を受けたがん患者の配偶者の予期悲嘆から悲嘆までの心理反応を前方視的・後方視的に調査することで、予期悲嘆から悲嘆までの悲嘆プロセスの全様を明らかにする。

(2) 治療の段階におけるがん患者の配偶者の心理を明らかにする。

(3) 予期悲嘆の心理的变化に影響を与えた要因を明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 緩和的化学療法を受けたがん患者の配偶者遺族を対象に、後方視的に死別前から死別後における心理的過程について半構造化面接を行い、質的帰納的に分析する。

(2) 緩和的化学療法を受けたがん患者の配偶者を対象に、前方視的に死別前から死別後における心理的過程について2~6か月ごとに半構造化面接を行い、質的帰納的に分析する。

4. 研究成果

(1) 研究方法(1)の成果

緩和的化学療法を受けたがん患者の配偶者遺族の死別前から死別後の体験として、死別前に【現状維持の期待の膨らみ】を持つ特徴があることが明らかとなった。その後、死別が免れないことを意識した配偶者は、死別後に【ひとりの悲しみの殻にこもる】体験のあと【ひとりでも生きていく努力】を行っていた。しかし【現状維持の期待の膨らみ】が持続した配偶者は、【生き続けられることへ傾倒】し、死別後も【生きていた頃へ固執】し【平然とした日常の装い】に至っていた。これらの結果より、配偶者が死別前にどれだけゆらぐ思いを理解してもらい支援されたか、治療状況や患者の状態をどれだけ理解し介護できたかという体験が、死別後の悲嘆の緩和に影響していることが分かった。そのため、看護師は、死別前に配偶者が治療効果にどれだけ期待を寄せているか把握し、支援することの重要性が示唆された。(図1)

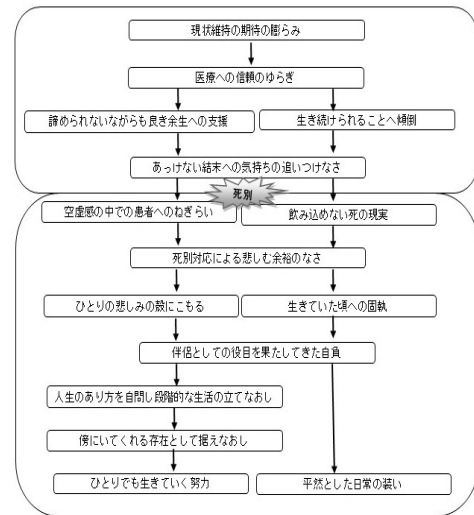


図1. 化学療法により生存期間が延長できた進行がん患者の配偶者の体験の流れ

(2) 研究方法(2)の成果

本研究では、各治療段階の配偶者の心理、および予期悲嘆に影響する要因を明らかにした。

各治療段階の配偶者の心理について

「緩和的化学療法の効果があると感じている時期の配偶者の体験」では、配偶者は、根治治療が難しいという説明を受けた後の抗がん剤治療に、最初のうちは「今後の経過への不安」を抱いていた。しかし、徐々に治療の効果が表れ患者の状態が回復していくと、「治療への期待の膨らみ」が見られるようになっていた。そして、いずれは死別が避けられないという「置かれた状況との直面回避」を行い、「普段通りに生活することを重視」し、「介護環境の整え」を行う特徴が明らかとなった。これらのことから、配偶者は、根治治療が厳しいことを認識しながらも、死別という現実を遠ざけてしまうことによって悲嘆を延期していることが考えられた。そのため、看護師は、配偶者が、抗がん剤治療を行っている状況をどのように理解し、どのような思いを持っているのかを把握し、状況を受け止めつつ、限られた時間を充実できるように支援する必要性が示唆された。

「緩和的化学療法の治療効果が望めなくなったと感じた時期の配偶者の体験」では、配偶者は、「治療効果が望めなくなってきた状況を認識し不安の増強」が生じていたが、これまで順

調に行われていた治療経過から「**払拭できない希望**」を持っていた。そしてその思いが強い人は、「**生き続けられる可能性を重視**」していたが、患者の状態や医師の態度から治療の継続に厳しさを感じた人は、「**充実した余命を過ごすことを重視**」する傾向があった。このような状況の中で配偶者は、「**他者との関係の中で気持ちの乱れ**」「**人間味ある看護師のケアによる癒し**」「**余命に関する戸惑い**」の影響を受け、「**徐々に死別が免れないことの予測**」を行うようになっていた。配偶者は、治療の効果が望めなくなり厳しい状況を理解しつつも、**払拭できない希望**を持ちつつ、何を重視するかで気持ちが揺れており、その揺れには、これまでの治療効果が持続しているときの期待の膨らみや他者との関係や余命の受け止め方が影響していることが考えられた。そのため、看護師は、抗がん剤治療を受けているがん患者の配偶者が、治療の効果が望めなくなり死別が現実的になってきた状況において、**悲しみをどのように体験しているのかを把握し、悔いのない時間が過ごせるよう支援を行う重要性が示唆された。**

「**緩和的化学療法中止後の配偶者の体験**」では、配偶者は、医師から治療の中止を説明され、「**緩和的化学療法中止の無念さ**」と「**避けられない死別の現実との直面**」の体験をしていた。そして、配偶者は、「**断ち切れない生存への願い**」を抱きながら、今後起こりうる「**終末期介護への当惑**」をしていた。さらに、「**患者と本音で語り合えないもどかしさ**」を持ち、「**患者の苦しみを推量し対応の模索**」を行っていた。日本人の特徴として、治療が中止になって初めて、**死別を現実的なものと捉え**るとともに、**患者と本音で語り合えないまま対応を模索することが分かった。**看護師は、緩和的化学療法早期から患者と家族の感情表出を促し、**納得のいく意思決定ができるよう支援することの必要性が示唆された。**(図2)

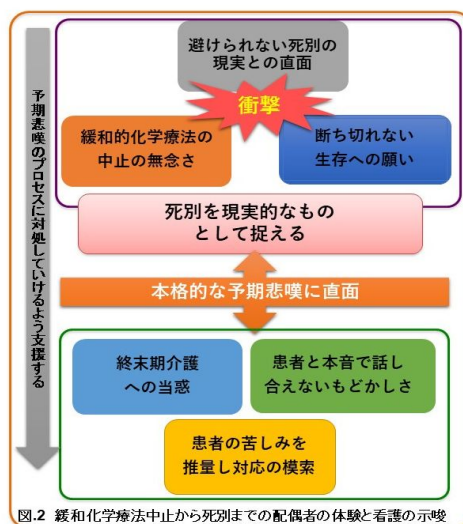


図2 緩和化学療法中止から死別までの配偶者の体験と看護の示唆

### 予期悲嘆に影響する要因について

「**緩和的化学療法を受けるがん患者配偶者の予期悲嘆に影響する要因**」として、「**がん診断時の衝撃の大きさ**」「**将来展望の崩れの程度**」「**がん発病を阻止できなかった後悔の程度**」「**病状説明に対する理解度**」「**治療法・療養場所の選択の戸惑いの程度**」「**医療者との意思疎通の程度**」「**患者との率直な対話の程度**」「**他者からの気遣いの認識の程度**」「**経過の見通せなさの程度**」「**生活にのしかかる負荷の程度**」「**死別の現実的認識の程度**」の11個のカテゴリが抽出された。看護師は、過去、現在、未来にわたる様々な要因がどの程度配偶者の予期悲嘆の体験に影響しているのかを把握し、**意思疎通を十分図り配偶者が状況を理解していけるよう、また、気がかりや負担が軽減できるように支援し、配偶者の心理状態が過度に不安定にならないようすることの重要性が示唆された。**(図3)



図3 緩和的化学療法を受けたがん患者の配偶者の予期悲嘆に影響する要因と看護の示唆

### (3)全調査のまとめ

本研究では、緩和的化学療法を受けるがん配偶者の死別前後の体験のプロセス、各治療時期における心理、予期悲嘆に及ぼす影響を明らかにした。その結果、緩和的化学療法を受けているがん患者の家族のゆらぎが予期悲嘆や悲嘆に影響していることが明らかとなり、看護師が、いかに治療中に患者・家族の感情表出や意思決定、予期悲嘆の体験を支えるかが重要であることが示唆された。この研究成果は、家族の過度のストレスや精神的苦痛を与える予期悲嘆の予防、さらには祝雑性悲嘆の予防、終末期の患者・家族理解および看護師の技術向上に向けて貴重な知見であり、医療・福祉に寄与すると考える。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 2件)

久松美佐子, 西田伊豆美, 荒井春美, 小玉博子, 益満智美, 野中弘美, 春田陽子, 堤由美子: 緩和的化学療法を期待しているがん患者配偶者の体験の分析. 鹿児島大学医学部保健学科紀要, 査読有, 29(1):143-149, 2019

久松美佐子, 堤由美子, 福崎伊豆美: 化学療法により生存期間が延長できた進行がん患者の配偶者の死別前後の体験の分析. 日本看護研究学会雑誌, 査読有, 41(5), 923-934, 2018.

〔学会発表〕(計 5件)

久松美佐子, 西田伊豆美, 堤由美子: 延命目的化学療法を受けたがん患者の配偶者の予期悲嘆に影響する要因. 第38回日本看護科学学会学術集会, 2018.

西田伊豆美, 久松美佐子, 堤由美子: 緩和化学療法を受けたがん患者の配偶者の治療中止時の体験. 第38回日本看護科学学会学術集会, 2018.

久松美佐子, 堤由美子, 福崎伊豆美: がん患者配偶者の抗がん剤治療の効果が望めなくなってきたと感じた時期の体験. 日本看護科学学会学術集会講演集 37回, [PD-24-4], 2017.

福崎伊豆美, 久松美佐子, 堤由美子: がん患者配偶者の抗がん剤治療の効果があると感じている時期の体験. 日本看護科学学会学術集会講演集 37回[PD-24-5], 2017.

久松美佐子, 堤由美子, 福崎伊豆美: 抗がん剤治療を受けたがん患者の配偶者遺族の死別前後の体験の分析. 第36回日本看護科学学会学術集会, p360, 2016.

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年:  
国内外の別:

取得状況(計 0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
取得年:  
国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究分担者

研究分担者氏名: 堤 由美子

ローマ字氏名: Yumiko Tsutsumi

所属研究機関名: 鹿児島大学

部局名: 医歯学域医学系

職名: 教授

研究者番号(8桁): 30207419

研究分担者氏名: 新地 洋之

ローマ字氏名: Hiroyuki Shinchi

所属研究機関名: 鹿児島大学

部局名: 医歯学域医学系

職名: 教授

研究者番号(8桁): 60284874

研究分担者氏名: 荒井 春生

ローマ字氏名：Harumi Arai

所属研究機関名：修文大学

部局名：看護部

職名：教授

研究者番号（8桁）：60406246

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。